

型紙コレクションにみる文様の傾向と比較 ——吉岡コレクションを例として

加茂 瑞穂（立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー）
E-mail mizuho.k83@gmail.com

要旨

立命館大学アート・リサーチセンターでは、吉岡幸雄氏が所蔵する染色に用いられる型紙コレクションのデジタルアーカイブを進め、全容を把握することができた。そこで本稿では、本コレクションの全容と特徴的な型紙について報告する。また、調査ではデジタル化した画像に対して文様に関する情報を付与し、蓄積してきた。このような手法を通じて得られた、型紙及び本コレクションの持つ特徴を他のコレクションと比較しつつ報告する。

abstract

The Art Research Center, Ritsumeikan University, has been conducting a digital archiving project of katagami, i.e., stencils for dyeing textiles, of several domestic and foreign institutions. This essay overviews the katagami collection of Yoshioka Sachio, a textile-dyeing artist in Kyoto, discussing its characteristic stencils. As katagami have hardly been researched, we categorize them into design patterns by using their digitized images and accumulated information. As there is another katagami collection we researched in the same way, the essay also compares this with the Yoshioka collection, discussing the latter's distinctive characteristics with examples of stencils.

はじめに

本稿で対象とする型紙は、柿渋を引いた和紙にさまざまな文様を彫刻し、小紋や浴衣、布団皮などの染色に使用される「道具」である。型紙は、研ぎ澄まされた彫刻技術と文様の組み合わせから多様なデザインが生み出された。その彫刻技法には、突彫・錐彫・道具彫・縞彫があり、彫刻した型紙の補強方法として「糸入れ」や大正期に開発された「紗張り」がある。型紙の制作に携わる職人は、それぞれの専門を持ち、使用する道具は技法により異なる¹⁾。高い彫刻技術や染色・彫刻に適した渋紙の生産技術が揃うことにより、質の高い型

紙が生み出され、型紙を用いた染色は、江戸時代中期以降に広く浸透したといわれる²⁾。

型紙は染色の道具である一方、近世から近代のデザインに対する探求心や遊び心を読みとることが可能な研究資源でもある。身の回りの植物や器物などが幾何学的な形状や極端に簡素化されて表現され、衣服などの生活に身近なデザインに対するこだわりや嗜好を伝えている。また、「商印」と呼ばれる型紙の下縁に押される角印や丸印には、地域や型を扱う者の氏名が記載され、型紙の制作地や流通状況を知る上で重要な資料ともなる³⁾。しかし、これまでの研究では、完成品であるキモノに注目が集まり、型紙の学術資料としての位置づけや型紙を分析・研究する分野も曖昧なままであった。

最近の学術研究の成果としては、19世紀末から20世紀初頭のジャポニズムの流行で海外へ渡った型紙が、海外の美術工芸に影響を与えていたことが明らかにされた⁴⁾。また、国内では三重県鈴鹿市を中心に型紙の制作は継続され、型紙に関する技術の広報活動も進められている⁵⁾。型紙は伝統産業の面から注目され、それに加えて、ようやく学術研究の俎上にあげられるようになった。

こうした潮流の中で立命館大学アート・リサーチセンター（以下、立命館ARC）では、現代の情報技術を活用し、高精細デジタルカメラによる型紙の撮影とデータベースの構築を進めた⁶⁾。本稿では、デジタル・アーカイブを進めた京都市の吉岡幸雄氏所蔵コレクションの内容を紹介するとともに、大量かつ文字情報の乏しい型紙を文様により分類し、明らかになったコレクションの特徴を報告する。また、本研究では型紙に表現されるデザインを整理することにより、デザイン並びに文様の歴史研究へと発展させることを意図している。

1 型紙のデジタル・アーカイブ化の必要性

先行研究では、型紙の流通や所蔵調査が主に進められてきた⁷⁾。研究内容が偏重した背景には、型紙に残る文字情報が少ない上に制作年代を特定する手段が確立されていないという資料の性質が要因としてあげられる⁸⁾。しかも、型紙の多くは数千、数万枚という単位で所蔵され、基礎的な調査を進めるには膨大な時間と労力を要する。さらには、出版物を通じて型紙が紹介されたとしても掲載図版はコレクションの一部に留まるため、資料群全体を把握することは困難である。そのため、型紙の文様やその展開に関する研究は福井氏が指摘するように

型紙を芸術・デザインの観点から分析し、様式の発展、展開を研究する美術史研究の側面はかなり立ち遅れているように思われるのである。実際に型紙は、幕末以来、欧米にもも

たらされて、彼の地の芸術・デザインに大きな衝撃と影響を与えた美術工芸品であるにもかかわらず、絵画や他の工芸よりも研究が等閑視されてきた感がある⁹⁾。

という状況にある。

型紙のデザインを研究するツールとして、画像データの閲覧と検索が可能なデータベース構築が求められる¹⁰⁾。文字情報が少なく視覚性の高い型紙には、画像の閲覧が必須である。また、大量の情報を一定程度にまで絞り込み、目的の情報をピックアップすることができるデータベースというツールは、型紙の研究にとって非常に有益となる。

立命館ARCでは、高精細デジタルカメラによる型紙の撮影をおこない、その上で型紙に関する基本情報、型紙の文様に関する文字情報を追加したデータベースを作成した。大量に存在する型紙に対し、文様や書入れ・商印・彫刻技法などの情報を随時追加でき、デザインの比較や変化を解明する研究にとって基盤となるものである。

2 吉岡コレクションの概要について

2.1 吉岡コレクションの来歴

立命館ARCでは、2010年度に京都市在住の染織史家吉岡幸雄氏が所蔵する型紙コレクションの調査、及びデジタル・アーカイブ化を実施し、筆者も調査と資料整理作業を担当した。

本コレクションの所蔵者である吉岡幸雄氏は、京都市にある「染司よしおか」五代目当主として、植物染による平安王朝の色を文献資料や自身の経験から復活させている。本コレクションは、幸雄氏の父であり、四代目当主の吉岡常雄氏（1916-1988）が中心となり蒐集した型紙である。常雄氏は染織の研究とともに、世界各国の染織品を蒐集しており、日本の型紙もその一部である。蒐集された型紙の内訳は、常雄氏自身が集めた型紙と廃業した染屋から譲り受けた型紙などで構成されている¹¹⁾。

吉岡コレクションの型紙は、これまでに図版入りで『日本の型紙文様』¹²⁾、『吉岡コレクション 型紙型染』¹³⁾に紹介されている。『吉岡コレクション 型紙型染』ではコレクションの内、390点を図版として掲載している（掲載された型紙の一部分は原寸大で掲載されている）。吉岡幸雄氏によると、書籍出版にあたり、コレクションの整理と調査をおこなったが、保存状態が良い資料を中心に図版掲載したため、コレクション全体の規模は把握できなかったという。

2.2 吉岡コレクションの特徴とデジタル化

本調査では、高精細デジタルカメラによる撮影をおこなうため、資料一点ごとに資料番号をつけて作業を進めた。本コレクションは、整理作業以前に14の箱に収蔵されていた。そのため、資料番号は既存の分類や整理状況を反映し、箱に1～14の番号を振り、その後ろに個番号をつける方式を採用し、何枚の型紙がどの箱に収蔵されていたのか、以前の整理状況を把握できるようにした。なお、1～14の箱の内、9箱については意匠や用途による分類がすでにおこなわれていた。参考のため箱に記載された名称をあげ、その右には今回の整理に際して付与した資料番号を記載しておく。（10～14の箱については特に分類はなされていない。）

- | | |
|-----------|-------------------|
| 1. 更紗・糸入れ | yos01-0001 ～ 0049 |
| 2. 中形 | yos02-0001 ～ 0104 |
| 3. 鳴海紺型 | yos03-0001 ～ 0040 |
| 4. 縞・格子 | yos04-0001 ～ 0103 |
| 5. 試し彫 | yos05-0001 ～ 0057 |
| 6. 中形 | yos06-0001 ～ 0236 |
| 7. 紺型 | yos07-0001 ～ 0209 |
| 8. 追掛型 | yos08-0001 ～ 0169 |
| 9. 中形 | yos09-0001 ～ 0241 |

1～9の箱の分類を確認してみると「中形」と呼ばれる、小紋よりも大きな文様の型紙が2、6、9の箱に500枚以上収められていた。このことから、比較的文様の大きい型紙が多くの割合を占めているコレ

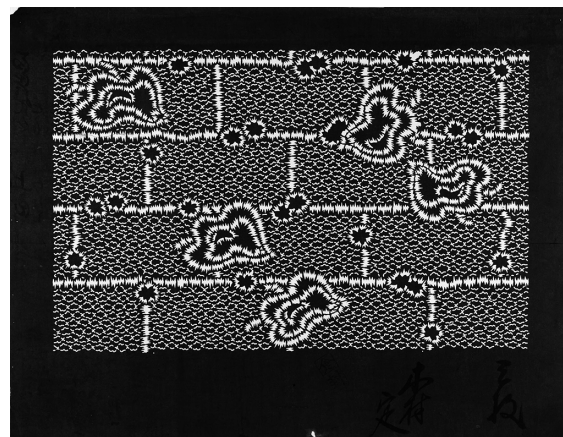


図1-1 「千鳥に石垣」(yos03-0038)

※以下、記載のない場合はすべて吉岡コレクション蔵。

※図版タイトル内、図1～3・5・6は筆者による。それ以外は『型紙型染』（紫紅社、1989年）を参照した。

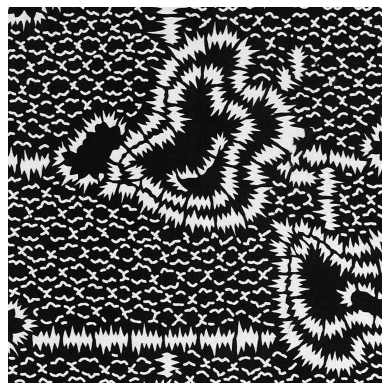


図1-2 拡大図

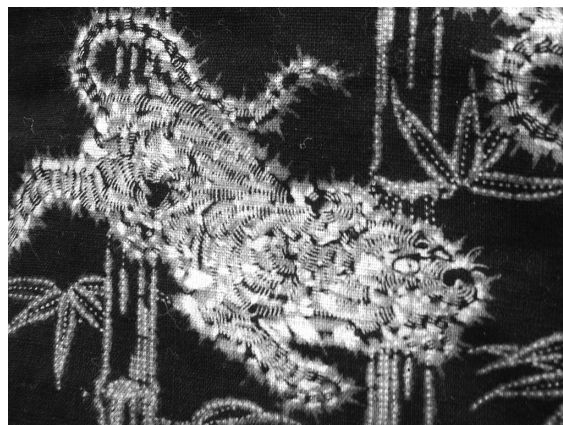


図2 「虎に竹」部分（奥西コレクション）

クションと言えるだろう。また、この他にも内訳を一部紹介すると「3.鳴海紺型」には「うるみ型」とも呼ばれる絞り染を型紙によって表現する手法の型紙が収められていた。鳴海紺型の型紙は、図1-2のように絞り染を表現するため、輪郭線が鋸刃のように彫刻される。そして、「鳴海紺型」型紙により染色されると図2のように、輪郭線はやや淡い色に

染まり、絞り染のような表現となるのである。「鳴海紺型」の型紙は多くが東北地方で確認されているため¹⁴⁾、吉岡コレクションに所蔵される「鳴海紺型」の型紙も東北地方からもたらされた可能性がある。

「5. 試し彫り」には、「小本」が含まれていた。小本とは、型紙を作る前段階の資料で、本コレクションには21枚が含まれていた¹⁵⁾。大きさはまちまちだが、図3のような型紙本紙よりも小型の渋紙で、連続文様を構成するために使用される。小本は、最小単位の文様を少しずつ増やし、連続文様にして作成される。さらに完成した小本を使って、本紙へ墨と刷毛を使って刷り込み、文様を写す。これを四方に繰り返して型紙全体へ転写するのである。一枚の小本を用いて、型紙全体へ文様の歪みが出ないように転写し、完成すると彫刻作業へと移行する。小本の歪みは本紙全体の歪みとなるため、小本の作成や本紙への転写は重要な作業となる。しかし、小本は型彫師の元で使用される道具であり、染色用の型紙として染屋や型屋へ販売されるような流通経路に乗る可能性はさわめて低い。一般的な型紙の流通から考える限り、本コレクションに所蔵される小本は、型彫師のもとから渡ってきたと推定される。また、「8. 追掛型」と呼ばれる複数枚の型紙により一つの文様が作り出される型紙も209枚が収納されていた。しかし型紙が離散し、染色された布地へどのような表現がなされていたのか、現在となっては不明な型紙も見受けられた。

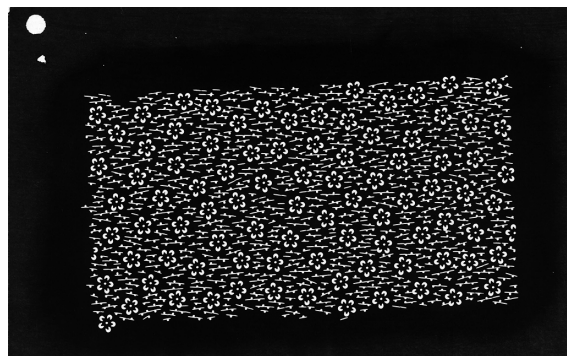


図3 小本「梅」(yos05-0038)

以上のように、2010年のデジタル化を契機として、コレクションの一覧性が高まり、特徴的な型紙の存在や総数2203枚にも及ぶコレクションであることが判

明した。また、本コレクションには型紙の送り幅が狭く、制作年代がかなり遡ると考えられる資料(図4-2)から、「紗張り」と呼ばれる大正期に開発された型紙補強の技法を用いた型紙までが含まれ、広い時代にわたって蒐集された貴重なコレクションといえる。

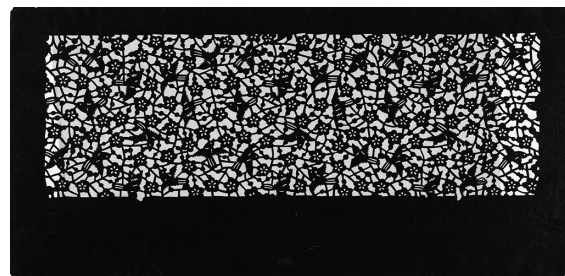


図4-1 「梅に鶯」(yos11-0017)

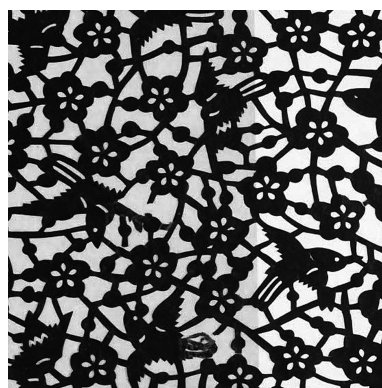


図4-2 拡大図

3 型紙の文様分類について

3.1 文様分類の方針

型紙のデジタル化終了後、研究資料として活用していくためには型紙に付随する情報を整理する必要がある。型紙には墨書や商印が残る場合を除いては、文字情報が付随する例は稀である。そこで、大量の型紙を分類するために、彫刻された文様を頼りに資料の情報を整理する方法が最も効果的と考えた。筆者は型紙の文様を研究していくための情報として、一枚の型紙に使用される文様を「ものの」に即して分類を与えることとした。分類は三段階の階層に分け、大分類・中分類・小分類の順に詳細に区分していく方式を採用している。大分類は「植物」「動物」「器物」(調度、建造物、武具

など含む)「幾何学」「自然」(風景を含む)「人物」「文字」「その他」(不明分を含む)と型紙特有の「小紋」を加えた9種類を設定した。文様の分類は、大分類から小分類まで、それぞれ複数の分類を設定することができるようにした。たとえば図5のように「自然」と「動物」に分類される文様を組み合わせた型紙であれば、分類を「自然」と「動物」に登録している。また、文様の中には図6「麻の葉」など、形状は「幾何学」に分類されるが、麻の葉を模して「植物」とも分類可能な、複数の分類に跨る文様が存在する。データベースでは分類項目を単一に絞る必要がないため、麻の葉の場合は「幾何学」と「植物」の分類情報を付加している。

上記の文様に対する分類は、美術工芸作品にも応用可能であり、型紙に限定した分類方法ではない¹⁶⁾。また、型紙は、類似したデザインを有する場合が多く、比較的緩やかな分類方法を採用することにより、同様の文様が使用されている型紙を比較できるようにした。こうした分類方法を採用した「型紙データベース」では型紙の文様により、目的の資料を検索することができる。



図5 「流水に鯉」(yos01-0014)

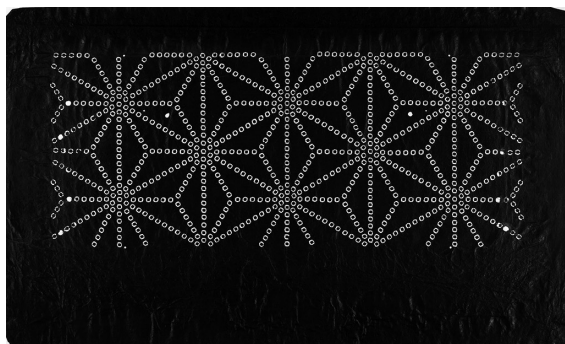


図6 「麻の葉」(yos01-0020)

3.2 吉岡コレクションにみる文様の使用傾向

本コレクション全2203枚(一部復刻型を含む)に対して、前述の大分類に当てはめて整理をおこなった。その結果が表1である。表1には、分類項目にあてはまる型紙の枚数と全体に占める割合をまとめている。項目「該当する型紙」は、先述のように一つの型紙に対し、複数の分類を登録可能としている。そのため、型紙の2203枚よりも合計した数が大きくなっている。

表1に挙げた割合を確認してみると、まず「植物」の文様を用いた型紙の割合が30パーセントを越えて最も高く、約半数の型紙には植物文様が用いられていたことが判明した。続く「幾何学」は20パーセントを占め、型紙の枚数では700枚を越えた。続いて、「動物」の429枚、「小紋」の358枚、「器物」の322枚、「自然」の146枚となり、最も使用頻度の低い分類は「人物」で、10枚の確認にとどまった。なお「その他」には、分類に該当しない型紙や文様を判別することができない複数枚で一つのデザインを構成する型紙を含む。なかでも文様を判別することのできない型紙は「その他」に分類された内25パーセントを占めていた。文様を判別することができない型紙については、今後画像から判断して本来のまとまりに戻すことも視野にいられている。

表1 「型紙に使用される文様の割合(吉岡コレクション)」

分類	該当する型紙 (枚)	割合
植物	1106	31.8%
幾何学	738	21.2%
小紋	358	10.3%
動物	429	12.3%
器物	322	9.2%
人物	10	0.3%
自然	146	4.2%
その他	374	10.7%
合計	3483	100.0%

資料数	2203
-----	------

以上のような文様が使用される頻度を整理してみると、吉岡コレクションにおいて「植物」と「幾何学」に分類される文様の使用頻度が突出して高かったことが新たに判明した。

3.3 他コレクションとの比較にみる吉岡コレクションの特徴

では次に、本コレクションにおける分類毎の割合を同じく立命館 ARCにおいてデジタル・アーカイブを進めた株式会社キョーテックコレクションと比較してみたい。

キョーテックコレクションは、約18,000枚を有す大規模なコレクションで、近世後期から昭和初期頃までに制作された型紙が含まれる京都市内にあるコレクションである¹⁷⁾。本コレクションを有する株式会社キョーテックは、昭和初期に型紙の彫刻・販売を手掛ける「佐野意匠型紙店」として創業した。販売のかたわら蒐集された型紙が現在の本コレクションの多くを占め、一部は廃業する染屋から譲渡されたものが含まれる。

キョーテックコレクションも吉岡コレクションと同様に文様の分類をおこない、その結果、表2のような割合となった。二つのコレクションは、「植物」に続いて「幾何学」に分類される文様が使用頻度の高

い傾向にある点で共通している。また、この二種類により、全体の過半数の割合を占める点も共通している。ただし、キョーテックコレクションでは「植物」と「幾何学」の差が僅かであるが、吉岡コレクションでは「植物」が「幾何学」よりも10パーセント程度多く割合を占めている。そのため、吉岡コレクションの方がより「植物」文様の型紙が占める割合が高くなっていた。

キョーテックコレクションの型紙を蒐集した佐野義男氏(1903-1986)は、さまざまなデザインの型紙を蒐集したとされるが¹⁸⁾、文様の分類は「植物」や「幾何学」の文様が過半数を占める結果となっている。一方、吉岡コレクションも常雄氏が蒐集した型紙に加え、染屋から一括して引き取った型紙により形成されている。両コレクション形成にあたり、一定のデザインに関する選定はおこなわれたと想像されるが、「植物」や「幾何学」文様の型紙ばかりを蒐集するというような極端な型紙の選定が行われたと考えにくい。今後さらなる検討が必要となるが、両コレクションの傾向を見る限りでは、型紙に彫刻される文様は総じて「植物」続いて「幾何学」が多く制作される傾向にあったと考えるのが妥当ではなかろうか。また、制作状況を考慮すると、型紙を使用した布帛のデザインとして、「植物」や「幾何学」の文様が広く好まれる傾向にあったと考えられる。

両コレクションの型紙に使用される文様の傾向を比較すると「植物」「幾何学」に続く、三番目以降の分類に異なる点が見受けられた。吉岡コレクションでは、「動物」の文様を含む型紙が三番目に高い割合を占めていたが、キョーテックコレクションでは、「小紋」が占めている。吉岡コレクションの方が、全体の割合として「小紋」よりも文様の大きな「中形」の型紙が所蔵される傾向にあったことがわかる。この点は、「2-2 吉岡コレクションの特徴とデジタル化」で述べた「中形」と名付けられた箱に500枚以上の型紙が収蔵されていた点と相違ない。なお、各コレクションにおいて三番目に割合を占める「動物」と「小紋」以外は、「器物」「自然」「人物」という同様の順位を示していた(「その他」を除く)。

表2 「型紙に使用される文様の割合(キョーテックコレクション)」

分類	該当する型紙 (枚)	割合
植物	7216	28.3%
幾何学	7031	27.6%
小紋	3101	12.2%
動物	2392	9.4%
器物	1571	6.2%
人物	16	0.1%
自然	857	3.4%
その他	3289	12.9%
合計	25473	100.0%

資料数	17802
-----	-------

コレクションにより、所蔵枚数や各分類に占める割合は異なるものの、両コレクションにおいて、ある程度同様の傾向を示していることから、型紙に用いられる文様の傾向を知るための一指標となるだろう。今後、他のコレクションにおいて、使用される文様の傾向が、これまでに整理したコレクションと異なることが判明した場合は、型紙蒐集の際や請け負う仕事の内容などに関わり、デザインに対する選定がおこなわれていたことの裏付けにもなると考える。吉岡コレクションとキョーテックコレクションの比較結果を踏まえ、型紙に表現される文様の傾向が、他のコレクションにも該当し、型紙の一般的な傾向として結論づけられるのか、今後さらに検証したい。

3.4 共通するデザインの型紙

型紙のデジタル化と文様の分類をおこなうと、大量の資料から類似する型紙の画像を集めることができる。中には、別コレクションにおいて共通する型紙を確認することができる場合もある。数千、数万枚に及ぶ型紙をデジタル・アーカイブすることにより、画像を比較考察することが可能となったことによる効用の一つである。

図7-1は、吉岡コレクションに所蔵される型紙の一枚であるが、全く同じデザインの型紙が豊岡市立出土文化財管理センターにも所蔵されていたことを確認した。しかし、二枚を重ねてみると文様の位置が正確には重ならないため、同時に彫刻された型紙ではないことが判明した。しかし、同じ関西地域に所蔵される型紙のため、共通する販売元や型彫師の可能性もある。

図7-2のような同一のデザインを有する型紙が別のコレクションから出現する事例を筆者はこれまでいくつか確認した。例えば、図8-2のように漢字の「大」片仮名の「サ」「カ」と彫刻された型紙は、吉岡コレクション、キョーテックコレクション、豊岡市立出土文化財管理センターの三カ所から確認している¹⁹⁾。型紙は膨大な資料数であるが、一度に複数枚の型が彫刻され、かつ復刻も繰り返しおこなわれていた。共通するデザインの型紙を見つけ出すことによ

り、定番のデザインや型紙流通の様相を新たな視点から解明する糸口となる可能性もある。

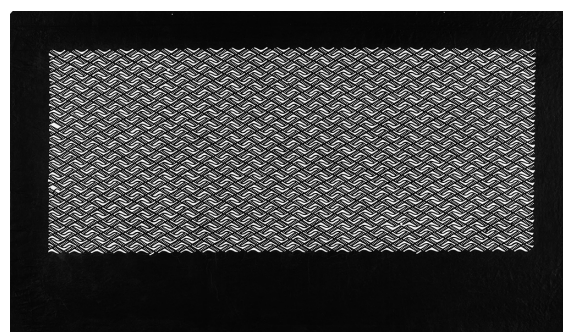


図7-1 「刷毛菱ならべ」(yos09-0213)

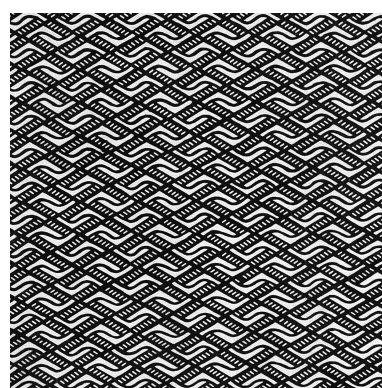


図7-2 拡大図

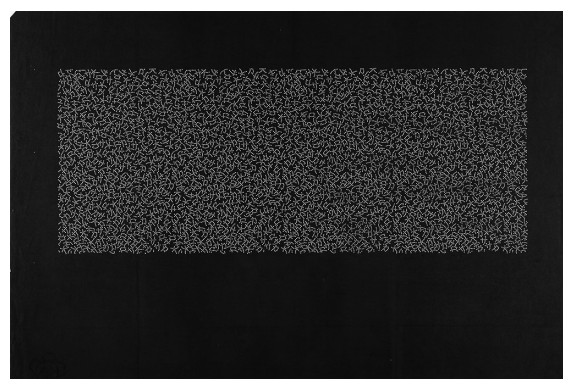


図8-1 「文字大サカ」(yos10-0152)

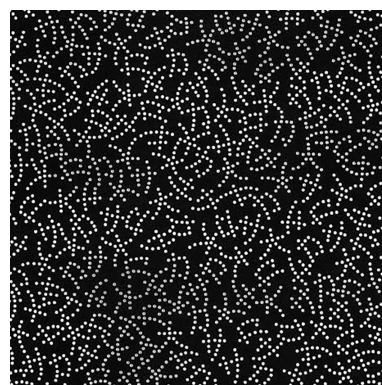


図8-2 拡大図

おわりに

本稿では吉岡コレクションのデジタル化を皮切りとしてコレクション全容の把握や型紙に用いられる文様の傾向を分析した。本コレクションには、制作年代を特定することはできないものの、非常に古い型紙や流通経路に乗らない「小本」や絞り染を型紙により表現する「鳴海型」など特色のある型紙が所蔵されている。デジタル化を契機として、さらなる研究資源化を進展させたい。

本コレクションの型紙に用いられる文様を分類項目に即して整理してみると、「植物」や「幾何学」に偏る傾向が見受けられた。この傾向は筆者がすでに分類したキョーテックコレクションとも共通するため、型紙に用いられる文様の傾向とも理解できることが新たに判明した。しかし、両コレクションには異なる傾向を示す分類もあるため、文様の傾向に関してはさらに他コレクションの調査を進め、一般化を進めたい。型紙コレクションにおける分類毎の割合や傾向を明らかにすることにより、定番のデザインや地域性、あるいはコレクションを形成した人物によるデザインの選定や嗜好を明らかにする研究に展開させることが可能となる。

本稿では、本コレクションの概要紹介と文様の分析に重きを置いた。本コレクションに残る商印や墨書の情報整理、及び分析は今後の課題としておく。

〔付記〕

吉岡コレクションのデジタル化は、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「京都における工芸文化の総合的研究」(S1001041)の研究成果の一部である。

本コレクションのデジタル化には、所蔵者である吉岡幸雄氏をはじめ、立命館大学アート・リサーチセンター関係者の皆様に多大なご協力をいただきました。また、資料の掲載をご許可いただきました所蔵者の方にも末筆ながら記して御礼申し上げます。

〔注釈〕

- 1) 型紙彫刻の技法や道具については『極小の宇宙

手わざの粹—伊勢型紙の歴史と展開—(三重県立美術館、2014年)に詳しい。

- 2) 長崎巖「日本の型紙染の発生と展開に関する一考察」『共立女子大学家政学部紀要』53、2007年
- 3) 商印から型紙流通を考察した論考としては、『東北歴史資料館資料集21 型紙 宮城県米山町新田家に伝わる』(東北歴史資料館、1988年)、長島雄一「近世における東北地方の型紙流通について—商印をもとにした基礎的研究」(『福島県立博物館紀要』12、1998年)、小森綾子「田中直コレクション 染の型紙—商印・墨書から流通をみる」(『京都精華大学紀要』25、2003年)などがある。
- 4) 『Katagami Style—世界が恋した日本のデザイン』三菱一号館美術館、2012年
- 5) 石神井公園ふるさと文化館「型紙の美 武蔵大学蔵『朝田家型紙コレクション』—幕末から明治の染の世界—」(2014年)では、展覧会に加えて職人の実演なども含めた関連イベントを開催した。
- 6) 「型紙データベース」<<http://www.dh-jac.net/db1/stencil/about.php>> 画像の公開は立命館ARC所蔵分860枚に限り、他コレクションの閲覧は館内利用となっている。
- 7) 所蔵目録としては、『鈴鹿市所蔵 古代型紙目録』(三重県立美術館、2008年)、『東京都江戸東京博物館資料目録—長板中形型紙』(江戸東京博物館、2008年)などがある。
- 8) 型紙の編年研究については、近年本格的な研究が開始され、長崎巖「染型紙の編年に関する試論(その一)」(『共立女子大学家政学部紀要』57、2011年)などがある。
- 9) 福井泰民「江戸小紋小史—着物と型紙による小紋の発生と展開」『江戸小紋と型紙—極小の美の世界』渋谷区立松濤美術館、1999年、p.38
- 10) 「京都精華大学ギャラリーフロール所蔵品検索」<http://fleur.kyoto-seika.ac.jp/artizeweb/category_C.do>や「国立歴史民俗博物館 館蔵染色用型紙データベース」<http://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/login.pl?p=param/ksg/db_param>などから所蔵する型紙の情報検索と画像の閲覧が可能である。また、愛媛県立歴史文化博物館では館内利用の型紙データベースが存在する。(松井寿「愛媛の染型紙—型紙データベースができるまで」『ときめくファッション—小町娘からモダンガールまで』、2006年)
- 11) 吉岡幸雄氏の証言による。
- 12) 京都書院、1977年
- 13) 紫紅社、1989年。この他に増井一平氏が「型紙・美の系譜」(『日本の型紙 季刊Kimono別冊』、

1998年)の中で、本コレクションの一部を日本最古の型紙として紹介している。

- 14) 絞り染の風合いを表現する型紙は、東北地方から数多く確認されている。(鈴木さやか「染型紙の地域的特徴に関する分析的研究」『服飾文化学会誌』10、2009年・川又勝子、佐々木栄一「常盤紺型の文様—絞り文様について—」『東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部紀要』41、2010年、ほか。)
- 15) 『染の型紙』京都国立博物館、1968年
- 16) 立命館ARCが所蔵する友禅下絵を整理する山本真紗子氏とともに分類項目を整理している。異なる資料であるが、染織に関わる共通性の高い資料であるため、分類方法を共有している。
- 17) キョーテックコレクションについては、拙稿「型紙コレクションのデジタル・アーカイブとその効用」『アート・ドキュメンテーション研究』22、2015年、に詳しい。
- 18) 株式会社キョーテック代表取締役社長佐野聡伸氏の証言による。
- 19) この他にも共通するデザインの型紙を異なるコレクションから確認しているため、詳細は拙稿(前掲註17)を参照のこと。